

彼はヒューゴ・ボスを着る その の1

宇加谷研一郎

1 透明犬

目の前に赤い液体があった。その赤い液体を飲めば、ほんの数秒間のあいだ、透明になれるときいて、彼はそれを買ってみたのだった。

彼が液体を買って帰宅した真夜中、いざその赤い液体をグラスに注いでみた彼だったが、なかなか飲もうとしなかった。グラスの赤い液体は、光線の関係でどこかブルーベリー・ジュースのような赤紫色にもみえた。ベリーのように、甘酸っぱい味がするのであれば、夏の午後に飲みたいな、と彼はどこかで「透明になれる」とは別のことを思った。夏の午後、彼はよく、仕事がおわると渋谷のカフェで、ブルーベリー・ジュースを飲んだのだ。そこでは、注文と同時にブルーベリーをミキサーでジュースにしてくれて、彼はしばらくたてのベリーを飲んだものだった。

<<彼は数秒間、透明になって、どうしたかったんだろうか?>>

彼がとくに望むことなくとも、彼の存在感はすでにこの世の中において、十分にうすくなっていた。誰も彼の動向を気にするものはいないように思え、そのことに自分でも気がついていて。その彼が、数秒間透明になったところで、透明になっても、ならなくても、彼の人生そのものは表も裏も、なにひとつかわることがないだろう。

彼は信じていたのだ。自分が透明になれる赤い液体を前に、飲むべきか飲まざるべきかを考えている時間そのものを経験している者が、この世のなかでわずかなのだと。全世界の共通認識として、まだ誰も透明になっていないのだ、ということ。たとえ、彼自身の社会的存在からしてすでに透明であって、実体まで透明にする必要などどこにもなかったとしても、彼自身の問題として、「自分は、これから人類が経験していない体験をするのだ」という充実感こそが、彼の心を熱くした。ずばり、誰もやったことがないことをやる、ということにこれから挑戦することだけが、彼の関心であって、透明になってみることなど、結局のところ彼には興味がなかったかもしれない。

それで彼は、赤い液体を眺めているのだ。

この透明な液体を彼に提供した人物は、あるNASAの秘密研究所の科学者だったらしいKという男だった。彼は、渋谷のスクランブル交差点で、犬のかぶりものをかぶってパチンコの広告チラシを配る仕事をしていたのだが、彼とKが出会ったのが、その渋谷の交差点なのだった。

○

犬のぬいぐるみをかぶった彼が、どれだけ一生懸命な表情をしていても、ぬいぐるみの犬はずっとかわらない笑顔でいつづける。ぬいぐるみの内側で、冬の寒さにうちふるえていても、外見はいつけん犬の毛皮のようなものを着ている彼は、けっして震えている人間にはみえないし、彼がぬいぐるみの内側でどれだけ汗をかいていても、誰の目にもあせだくの彼の姿はみえない。そしてそもそも、ぬいぐるみを着て広告チラシを配っている彼を、人間だとみなす人間は、この渋谷の街に誰もいないように思えた。

NASAの秘密研究所の元科学者だと名乗ったKだけが、彼が犬でもなければ、犬のようなものでもなくて、れっきとした人間であるとみてくれたのだった。その証拠に、自称元科学者のKは、渋谷の交差点でチラシを配っては拒否されている犬のぬいぐるみの彼に、話しかけたのだ。

「ねえ君。君は透明になりたいと思ったことはないかい？」

Kがそう話しかけてきたとき、犬のぬいぐるみに入っていた彼は、きよとん、とした。今までその存在に気がついた者が誰もいなかったのみならず、こうした思想にまつわるような話をもちかけられたこともなかったからだ。世の中にあふれているという新興宗教の勧誘や、サギ師がかかわった悪徳商法の類も、彼のような犬のきぐるみをきたチラシ配りの男は対象から外れていたのである。

「透明になりたいか？」

と、聞かれたときに彼が思ったのは、前述したとおり、「僕はもう透明人間みたいなものだ」という思いだったが、僕はもうとっくに透明なんだ、ということについて、あらためて認識したことは、しらふのときには初めてのことだった。なぜならば、渋谷の街なかで、「自分は透明だ」などと思いつながら、犬のぬいぐるみをかぶってチラシを配りつづけることなんて、できないからである。チラシ配りにはチラシ配りのコツというものがあるって、その第一は、自分の社会的役割について思考をめぐらせるヒマがあるならば、すこしでも心を空っぽにして、歩行

者の呼吸にあわせて、その隙を突いてチラシをさしだすのである。

チラシをもらってもら、渡す、という発想ではなく、反射的に手の前にチラシがあって、呼吸と歩行リズムの関係上、いやがおうでも手にとらざるをえないタイミングをはかることこそが、彼の仕事であって、そんな時間には、「自分は透明な存在か？」などと思っただけで、仕事にならない。

だから彼は、Kが問いかけた「透明になりたいか？」という質問については、何もこたえられなかった。こたえようとしなかった。だが、Kにとって、この謎めいた質問が、この仕事をしてはじめてまともに人間として訊ねられたといかけであり、なによりKはヒューゴ・ボスのスーツを着ていた。そのスーツを、彼はメンズ雑誌でみたことがあったからだ。Kのスーツのポケットは、ポケットにも関わらず、その両サイドも、胸ポケットも、縫い合わせてあって、ポケットにもかかわらず、ポケットの機能を拒否していた。その理由を彼が雑誌で読んだとき、彼は胸をふるわせたものだった。スーツを着る者は、ポケットに物など入れない、と書いてあったのだ。

さらに、ヒューゴ・ボスというのは、元々がドイツの軍服をデザインしていたという。彼も、自分がかぶっている犬のぬいぐるみが、空軍の戦闘服だったならばどれだけよいだろうかと、夢見る時間があったのだ。そういうわけで、彼にとって、Kの質問の内容にまったくの興味をもたなかったが、Kがヒューゴ・ボスを着ている人間だったことと、なにより自分にはじめて人間が話す内容のようなことを質問してきた相手だったことがうれしく、彼は、ここでぬいぐるみを脱いで、いますぐKと、「透明問題」について論じたいと思った。

だがその瞬間、彼のあたまのなかに、フジモトさんの後ろ姿がはっきりとみえたのである。

フジモトさんは、彼といっしょに犬のぬいぐるみをかぶっていた同僚であった。だが同僚というには、フジモトさんは年をとりすぎていて、彼よりも40歳も年上だった。つまり、もう足腰もおぼつかないと思われかねない老衰年代だったのだ。だがフジモトさんの自慢は、その足腰と、年齢にもかかわらず身軽で愛嬌があるところであって、いまま毎朝、早朝の代々木公園で太極拳のイベントに参加している。ぬいぐるみをかぶったチラシくぼりの仕事は、たしかに給料も安いし、仕事も過酷ではあったけれど、パソコンも携帯電話もろくに使えず、ぬいぐるみかぶりで済めば、どれほど愛嬌よく軽々とうごけたって、その外見はとて労働できる姿ではなかった。

そんなフジモトさんにとって、この仕事だけが、自分がまだ社会の一員として自覚できる瞬間だったから、たとえ給料をいまよりもさらに3割ひかれたって、この仕事を続けたまま死にたい——そう言っていたフジモトさんが、先日クビになったのである。

フジモトさんがクビになったのは、渋谷の交差点で倒れた女の子を介抱したからだ、ということを知ったとき、彼の胸のなかで、哀しみが二重に襲ってくる。ひとつは、フジモトさんは、倒れた女の子がいるのに、みんなが関わらないように歩きさっていくなか、声がだせないぬいぐるみかぶりで、電話ももっていなかったフジモトさんだったから、彼は叫ぶしか方法がなかった。そのためは、パチンコ屋のチラシや、ぬいぐるみなどかまっていられるわけもなく、フジモトさんはチラシをその場にばらまいたまま、衣装をぬぎすてたまま、女の子をおぶって、大声で救急車を求めたわけだが、その現場をパチンコ店のチラシ配布監視員が目撃していたのだ。

チラシ配布監視員にとって、そもそも老衰にちかい老人がぬいぐるみをかぶっているということからして、目の上のたんこぶであった。監視員には、フジモトさんが愛嬌があって、毎日太極拳をしていてそのへんの学生よりも元気がある、ということなど、知らなかったし、たとえ知っていても、そのようなエピソードは個人的な問題であって、管理側には関係のないことだった。しかもチラシ配布監視員にとって何よりも大問題だったのは、自社のチラシをゴミ同然にまきちらし、精巧にできている犬のぬいぐるみかぶりを脱ぎちらかしたことで、そのぬいぐるみかぶりが盗まれてしまったことだった。

そんなわけで、フジモトさんはクビになるのだが、彼はもちろん、女の子を助けるための行動でクビを切ることに義憤を感じ、そんな会社で働き続けねばならない彼自身やフジモトさんを哀しく思うのである。

ところがもうひとつ、フジモトさんが急にクビになったことで、彼の仕事時間が増えたのだ。それによって彼の給料も大幅に増えることとなり、それ以前ならば、喉がかわけば「水道水よりほかに飲むものはなし」だった彼が、はじめて、渋谷でブルーベリー・ジュースを飲む機会を得たのである。彼は真夏のぬいぐるみかぶりで、水分という水分を出しつくし、だした水分と同じだけの水を飲むと、水中毒になるかのように気分が悪くなるようなそんな日に、ほんのコップ一杯のブルーベリー・ジュースを、渋谷のカフェで飲むというささやかな喜びを知ったのだ。そうすると、この一杯のよろこびが、フジモトさんの、あの寂しい後ろ姿と引き換えなんだということを思い出して、それでも、自分の本心は、この一杯を捨てきれないと思うと、ただ無性に自分の弱さが哀しいのだ。

ヒューゴ・ボスのスーツを着た男が彼に「透明になりたいと思ったことはないか？」と質問をしてきたときに、彼が結局、ぬいぐるみかぶりを脱いで返事をしなかったのは、この男がもしかしてチラシ配布監視員で、自分のことを試しているかもしれない、と思ったからである。

彼とKの会合は、本当ならば、ここで終わっていたはずで、終わっていたとすれば、いま彼の目の前に、赤い液体のはいたグラスが置かれることもなかったわけだ。

(続)